

キューブ型「光るランドセル」

ランドセルは実用品でありながら、子どもたちにとってはファッションの一部。(株)カバンのフジタは「子供の笑顔をつくる」をテーマに、デザイン・機能性に優れたランドセルをラインアップしている。新入学を前に、藤田家10代目の藤田宏次代表取締役社長を訪問し創業からの歩み、経営方針などをうかがった。

「人気のキューブ型ランドセルを発売して10年目になります。」

「時代のニーズに合った商品づくりをテーマとしている当社を象徴する商品です。2011年度に新学習指導要領が全国の小学校で完全実施され、教科書や教材のサイズが大型化しました。全体の大きさを変えず、A4判フラットファイルに対応した

ランドセルはできないか。コンパクトと大容量の両立です。」

「本体と背当てを内側から縫い合わせ、背当て回りに縫いしろが残らず見た目もすっきりしたキューブ型を開発しました。背当て・肩ベルト裏素材は体になじんでフィットする天然皮革を採用、背負いやすさと丈夫さを兼ね備えた『雪国生まれ』のオリジナルランドセルは評判になり

『光るランドセル(虹色翼のランドセル)』をラインアップしました。サイド面に翼の模様の反射材が取り付けられ、日中も太陽光やスマートフォンの光を当てると、角度によって赤、青、緑、オレンジなど虹色に輝きます。2022年度用に女の子のイメージもリリースしました。」

「写真集に歴史を物語る店の様子が掲載されています。」

「明確な史料は残されてはいませんが、菩提寺の過去帳や位牌等により、江戸時代の文化・文政期(1804〜30年)に近江国から現在地に移り住み、紅餅づくりを手掛けようです。最上川舟運、北前船で上

方に運ばれる途中、水に濡れて商品価値が落ちないように紅餅を入れた木箱をワラと油紙で厳重に梱包しました。紅花商人としては後発だったこともあって、耐水性のある油紙販売に転じ、明治・大正時代には防水商品である合羽・雨具や洋品雑貨を扱うようになりました。」

「カバンを取り扱うようになったのは1953年、当家8代目の祖父藤田吉治と父信夫のときです。父は夜行列車で東京・日本橋、浅草橋周辺の問屋街から商品を仕入れて販売しました。そして3年後に腕の良い職人を指名しランドセルづくりを始めました。ロングセラーとなった『びんちゃんランドセル』です。」

「山形、天童、福島、郡山各市のショッピングモールに店を構えるとともに、東京を中心に全国8都市で展示会開催に力を入れています。」

(株)カバンのフジタ

代表取締役社長 藤田宏次

設立 1957(昭和32)年5月

本社所在地 山形市十日町1-2-27

資本金 2,000万円

☎023-622-0210



「元気に楽しい学校生活を送ってほしい」。カラフルなランドセルを手にする藤田宏次社長(中央)とスタッフの皆さん(十日町本店)



新装開店当時の本店(昭和32年)

『山形エクセレントデザイン2019』に選ばれました。」

「さらに、子どもたちの安全性と背負ったときの楽しさを追求し、18年度用からはキューブ型の



人気の「光るランドセル」(ホームページより)

「もちろん十日町の店が私どもの本拠地です。中心市街地は歴史や文化があります。一方で消費者の立場になれば、車でショッピングできる郊外の大規模商業施設が便利です。お客さまの移動手段の進化に合わせて、ご来店に便利な立地を求め中心街から駅ビル、郊外店に出店しました。父の時代には12、3店舗出店したでしょうか。」

「数年前から東京を中心に首都圏でランドセルの展示会を行っています。地方では子供の数が減少しています。商品を製作してくれている腕の良い職人さんたちのためにも、ネットを使った販路拡大にも力を入れなければと思っています。」

「毎年、新入学児童にランドセルを寄贈しています。」

「就学支援として昭和31年から続けています。山形市内の生活保護世帯をはじめ、東日本大震災の避難児童にも送りました。子どもたちからお礼の手紙や絵が送られます。喜んで使ってもらえること、それが私たちの仕事の励みとなっています。地元あつてのフジタ。お客様が楽しいカバンを喜んで使っていたくことを大切に、お役に立つ商品を届けてまいります。」



ネット内で案内して首都圏で展示会を開催し販路拡大へ(埼玉 興大宮会場)